

第一回全体集会講演録(2009年3月4日、於・北海道大学百年記念会館大会議室)

「ユーラシア地域大国の比較研究」に 期待すること

猪 口 孝 (中央大学)

歴史的な視点の面白さ

ご紹介にあずかりました猪口です。私はスラブ研究センターの研究者のなかでは、伊東孝之、原暉之といった方々とはだいたい同じ頃大学院におりましてよく知っております。本当にロシア語が上手だったという記憶があります。しかし、その他の分野ではあまり接点がありませんでした。伊東さんは早稲田にいるし、原さんは北海道情報大学にいるということで懐かしく思います。

今回の「ユーラシア地域大国の比較研究」については、私も期待しておりまして、こういう雄大なのは、この不景気の真ん中のときには一番いいと思いますね。私自身は、もう半世紀近く前に中国語もロシア語も朝鮮語もやりまして、そうした言語で論文も書いたことがあります。最近でもロシア語の『ポリス』というロシア政治学会の雑誌に私の論文が載ったりしています。中国社会科学院には『世界経済と政治』という雑誌がありますが、そこにも私の論文が載っていますので御覧になってください。それからインドについては『インターナショナル・スタディーズ』という英語の雑誌があつて、ジャワハルラル・ネルー・ユニバーシティーから出ていますが、そこにも論文が載っております。

私は二つの点から非常にこのプロジェクトは面白くなると思っています。ひとつは歴史的な視点、もうひとつは国際政治みたいな地域的なガバナンスの視点で見たら面白いでしょうね。

歴史的な視点といいますと、きわめて古典的な人がたくさんいるわけです。中国ですと、内藤湖南という中国史の方がいますが、当時の人はものすごく大きなことを言っているわけですね。今の中国史の方たちはあまりにも細かくて、読むものはきちんと読んでいるのですが、何か細かすぎて興味がわからないようなものが多いです。内藤湖南ぐらいになるとすごく大きなことを言っていて、こんなことを言って大丈夫かなと思うことさえあります。要するに中国史は12世紀か10世紀くらいまではなかったという、そのくらいの頃から始ま

ったなどという大きなアイデアです。私は注目に値すると思います。どうしてそうかという、これはまた後で地球的ガバナンスの視点のときにお話します。

それからインドについては、ジェームズ・ミルというイギリスの哲学者というか思想家がいて、『ヒストリー・オブ・インディア』という本を書いています。皆さんがお読みになったかどうかは別として、これもまた簡単なのです。あの頃の人の歴史は簡単でいいと思うのですが、要するにインドの歴史というのは三部からなるとしています。ひとつはヒンズーの時代です。原始仏教みたいなものが変化して、ヒンズー教になっていったという話です。その次にイスラム教の時代というのがあって、ムガル帝国を征服してイスラム教を広げたわけですね。それから三番目は誇るべきイギリス、文明化の時代で、ブリテッシュとかイングリッシュへとつながるわけです。

その叙述を見てみると、いろいろなことが書いてあります。いちばん面白いと言ったら悪いのですが、妻の数が時代ごとに違うという話があります。ヒンズー時代はas many as possibleだから何人いてもいい、イスラム教の時代は4人ぐらいで、イギリスになったら1人だと書いてあります。これは意外と本当のことですし、いろいろなことを見る際に分かりやすいと思います。こういうことが印象に残っていますので、昔の歴史家は楽でよかったなといつも思っているわけです。

ロシアについてはウラジミル・ヴェルナツキーという人がいます。その子供がロシアの歴史家で、アメリカに移住したジョージ・ヴェルナツキーです。アメリカのどこかの大学で教えていました。ウラジミル・ヴェルナツキーの方は、あまり著書自体を見たことはないのですが、ジオロジーとか環境学とか、要するに地球学のようなことをした人です。ジェームズ・ミルがインドの歴史のひとつの大きなエッセンスをつかんで、ヒンズー教、イスラム教、それからイギリス教とか不思議な文明教の時代の三つに分けるとよく理解できると言うのと同じです。ヴェルナツキーはやはりこのロシアの大地からこそ歴史が分かるというようなことを考えて、かなり本気に地質学や気候学のようなものから研究を始めているという点が、とても面白いと私は思っているわけです。

ですから、ごちゃごちゃと込み入った最近の歴史ではなくて、いま挙げたような要素が少しでもあるようなものが面白いし、中国、インド、ロシアという大帝国的な地域について、何かイルミネートするというような観点から、何かしてくれないかなというのが私の期待です。

地球的なガバナンス

次に地球的ガバナンスの視点というのがあります。これと今述べた内藤湖南、ジェームズ・ミル、ヴェルナツキーとは少し関係します。内藤湖南が言っているのは、社会統治組

織から見たら宋以前は『三国志』みたいな世界で、軍隊だけはしっかり存在しているけれど、その他はみんなばらばらだったというような話です。本当に国としての統一体といえますか、統治組織がある程度しっかりしたのが宋のころからだというのは、何とか簡単でいいのではないかなと思います。そういう観点で、そのころの中国、ロシア、インドはどうだったのかというような問い掛けがあってもいいのではないですかね。

ジェームズ・ミルのインドについての観点から言いますと、同じころの中国やロシアは、宗教的にはどうだったのかと聞いてみたいと思います。時代的にそういうテーマを扱っている人がいるかどうか私は全く知らないですが、そういう研究があったらいいですね。

それからヴェルナツキーは、人口、気候、土地です。ロシア語でいうゼムリャーですけど、中国、インド、ロシアの、そうしたところを見たら面白いのではないかと勝手な期待をしています。新学術のチームの構成については、ウェブサイトを探しても詳しく分からないのですが、そういう研究もあった方がいいと思いますね。あんまり現代ばかりだと面白くないしロマンがないですから、ぜひともそういう歴史的な視点でやってほしい。それをしてもあまり罪も感じなかったし、誰からも罰せられない歴史家がいたころの調子で書くわけです。何とも元気で勇壮な歴史が書かれていますので、これをついでに比較してもらいたいと考えております。

ひとつガバナンスの観点から言いますと、『ニューズウィーク』にいつも書いているファリード・ザカリアというインド系のアメリカ人がいますが、彼が言うには今は米国後であると、あるいは米国後の時代がこれから始まるのだそうです。それならば米国の時代というのがあったはずですが、20世紀の大部分がそうなりますね。米国前というのがおそらく18世紀や19世紀でしょう。アブラハム・リンカーンが出てくるころから米国の時代が少しずつ始まって、20世紀の半ばごろからアメリカの時代が来たということだと思います。その米国前、米国の時代、米国後と分けて考えると、この大帝国のアメリカがそうでもなかったときに、他のところではどうだったのか、米国の力が盛り上がってきたときに、ロシアや中国やインドはどうだったのでしょうか。それから米国後については、これからどうするかというような問題を設定することによって、おそらくいい線が分かっていくのではないかなと思います。現代というか21世紀を研究するという人には、ぜひともやってほしいと思いますね。皆さんそれぞれロシア語も中国語も英語も読めるわけですから、それほど面倒くさいことはないですし、意外と面白くできるのではないですか。

国際秩序、ガバナンス、経済発展、帝国の崩壊・再編、国家の輪郭、越境、文化の求心力など、あらゆることが挙がっているわけですけど、シンセサイズしながらも比較をしていくというようなものがあると、すこし一般化しやすくなるのではないかなというのが、この地球的ガバナンスについて私が感じるところです。

ファリード・ザカリアが、『ポスト・アメリカンワールド』を書いているわけですよ。関

係ない話ですが、以前ニューヨークかどこかの会議で、夕食がファリード・ザカリアと同じテーブルだったことがありました。奥様もおられて、私は奥様とたくさん話をしていました。おそらく私もそのときは若かったのですが、彼はもっと若くて博士号を終わったばかりで、何か本を書いていたときだったと思います。奥様は私に How many books? というようなことを聞くわけですが、私は例によって誇大妄想家ですので、30冊ぐらいと言ったら奥様が驚いてしまい、旦那にむかって「ほら、もうちょっと頑張れ」と言いました。そんなことがあったのを記憶していますが、ファリード・ザカリアは本当に書き手として素晴らしい能力を持っている人で、私も尊敬しています。地域大国の比較研究をする際には、彼のアメリカ後の世界についてのように、何かフレームワークというか、概念的なものを持ってこられたら、新学術領域の6班分の全てがうまくいくように思います。

「ポスト」の世界秩序

それだけではなくて、現在を研究するのは趣味ではないので、もう少し歴史的にやりたいという人もいます。結局のところ私が思うのは、このインド、ロシア、中国のいずれもが、モンゴル帝国があったからこそできたと取ることも可能だということです。必ずしもモンゴル史の先生の言うことを丸のみしなくてもいいわけですが、確かにモンゴルはロシアを奴隷化したとか、ロシアはくびきに置かれたと言いますね。ロシア史を読むとタルタルのくびきから逃れたなどと書いてありますが、本当に逃れたかどうかは分からない、いずれにせよモンゴルの影響は大きいわけです。それはあまりロシア人の言うことだけを聞いても仕方がないことです。確かに影響があったわけで、おかげでようやく経済を運営することを知った、軍事的なやり方を知った、行政的なやり方を知ったということがあると思います。

中国についても、モンゴル人が激しく打ち負かした上で一気に征服したわけですから、それはもう驚愕したはずで、そのせいでいろいろな点が大きく変わったと思うわけです。統治制度だけではなくて、軍隊制度や経済なども何かが変わっているはずで、中国史の人は中国中心のですから、漢民族がずっと威張っていたと考えているかもしれません。しかし半分以上は別の民族だったといいますが、あるいはむしろ漢民族というのはいろいろ混ざっているのであって、漢民族は中心だったというよりは混ざったから強くなったという面が非常に強いわけです。けれどそういう風には書かれてはおりません。モンゴルの影響ということもあまり念頭にはないのではないかと、私は若干のマイルドな不信感を持って中国史家を見ている。

そこへいくと内藤湖南はすっかりしていいですね。単純だし、あまり細かいことを知らなくても、そうだとか違うとか言えるというところがあります。最近では板垣雄三先生に

よると、この人はイスラムなどを研究している人ですが、中国もイスラム文化の覇権下に入った時期がけっこう長かったという話です。服を見なさいとか、家の造り方を見なさいとか、北京の胡同を見なさい。確かにその通りかもしれないわけですが、そちらの方向にあまり振れすぎると、中国中心の普通の歴史を習ったり読んだりした多くの人にとってはやや反発するところがありますね。いずれにせよ、いったいどのようにして宋、元、明になったのかというのは、言うては悪いですが私と同世代の中国史の人は細かすぎて何を言っているか分からない、というよりも史料がたくさんあるので、切りもなく読んでいるのだろうと思います。

ただし内藤湖南になるとたくさん読んだわりには、すっきりとした結論が出るというのが素晴らしい魅力です。こういうことがないと歴史家としての任務をサボっていると見られるのではないかと私はいつも思っております。ぜひともモンゴル前後の中国史がどう変わってきたのか、どういう方向で変わったのかというのをやっていただきたい。アメリカ後の世界、つまりアメリカ後のロシア、アメリカ後の中国、アメリカ後のインドというのはひとつありますが、モンゴル後のロシア、モンゴル後の中国、モンゴル後のインドをやってみたら、Aプラスプラスプラスくらいの文科省の評価が付くのではないかと常に思っております。

そういうことを自分でするほどの元気はないのですが、歴史家というのは偉いものでして、あれほどのものを延々と読んでいるわけですね。歴史のない民族もありますけれど、歴史のあるロシアはたくさん残しているものがあるでしょうし、中国に至っては切りがないし、くわしくは知りませんがインドにも残っていると思います。イギリスの影響があったわけですから、記録という点ではすごいものがありますね。ジェームズ・ミルは確実に正しいと思いますけれど、イギリスの影響は大きいですよ。奥様の数がどのぐらいになったかというだけではないはずで、ムガールの影響だけではなくて、そうした点を見なければいけない。ただしそれはまた別な話でありまして、私の提案としては時代的な切り口についてはモンゴル前後とアメリカ後というところを両方あわせてみる、そして内藤湖南を皆さん読んでみてはいかがかと思います。

それからジェームズ・ミルも意外と長いものではなくて、すっきりしたものですから面白いですよ。こうした歴史的な視点から何と言いますか、昔の歴史家というのは単純でして、それほど意味はなくても言うことが大言壮語で大きいものですから、かえって逆に取っつきやすいという面があります。ぜひこの内藤湖南、ミル、ヴェルナツキーのような人を見ていただくと、ユーラシアの地域大国というのがいったいどのような歴史を持っているのか、まずその歴史的な段階や数百年前の雰囲気がよく分かるのではないかと私は思います。

ところで、私の関心はもっぱら現代ですので、それで終わってはいけません。アメリカ

後のロシア、中国、インド、これがどうなるのかというのを少し頑張って研究したらいいと思いますね。言葉としてはロシア語も中国語もできなくても、英語で何とかできます。あまり多くの言葉を見ると疲れる人が多いですね。

私もいろいろな言語ができるようなことを言いましたが、言葉ができるのは研究しているときの3年とか5年だけで、現在になると何も分かりません。ロシア語も校正するだけでもだめでして、中国語は辛うじて校正できたのですが、向こうでは何を言っているかと思ったでしょうね。要するに自分の文章を載せるときには、英語でも日本語でも誰かが訳してくれるわけです。あるいはそうしたやり方しかできないわけですが、ところが厄介なことに校正の原稿が来るのですね。ロシア語の校正で何かが書いてあっても、困ってしまいますよ。ロシア語の論文は、日本と中国と韓国と台湾の政治学の展開を特徴づけて比較したというようなものです。文献学的であり政治的な内容ではないので、それはまだ訳しやすかったようですね。

中国語の論文は、中国社会科学院の研究所のひとつで『世界経済と政治』という雑誌に載ったものです。2005年、ちょうど中国で反日暴動があったころです。上海の日本総領事館が攻撃されたり、日系の商店のガラスが割られたとかそんな事件がありました。それで『世界経済と政治』の編集長が「お前、何か書かないか」と言うので、「そうか、書いてほしいならいつでも書く」と返事しました。事件は4月ごろだったと思います。

私は何でも集中すると速いので、1週間ぐらいですぐにできてしまいます。英語で書いたのを向こうに送りまして、早く載ればいいと思っていたのですが、私の書いた文章に気に入らないところがあったようです。英語に訳すはずの人が夏休みに行ったなどと言い訳されまして、ようやく掲載されたのが2005年の11月号か12月号のどちらかです。その間の秋に校正が来たのですが、それは何とか辞書を引いて頑張って直しました。ある程度のインタラクションがないと、向こうが何を考えているか分からないですね。私の文章のどこが好かれなかったのかと思いはしましたが、それほど面倒なことを言ってきたわけでもないのです。もともと私は反中でも反露でも反米でもなくて、どちらかといえば親米、親中、親露です。外国の雑誌に載せるというのは意外と面白いですよ。ところで去年、自分が訳したという人にたまたま会うことができましたので、もう余計なことは言わず、幸い今度の春から学長を勤めるになることになったこともあり、留学生を交換しようなどいうことを伝えました。

勇壮なモンゴルの騎兵のように

話を元に戻しますが、やはりこういう大きいプロジェクトは概念的にもう少し比較をしやすいようにしないといけないと思います。あらゆる英知を結集するということは可能で

はありますが、読む人にとってそれは何でもありの立食パーティーですね。カレーライスと日本そばとスパゲティが一緒に出てくるようなもので、何かぐちゃぐちゃして味の印象が残らないことが多いと思います。モディファイしてもっとリッチにできるということはありますが、最初の概念的なところがうまくいかないと、みんなリッチなところだけを志向するというのが一番の問題ではないかと思っています。

文科省がそんなものはやらない方がいいなんていうのは間違いで、もちろんやった方がいい。それはもうビッグ・スティミュラス・パッケージがあればあるほどいいのです。何でも財政的にも時間的にも組織的にも大きい方がいいというのが私の信念です。

ただし、それぞれの小さな洞穴に住んでいるキツネみたいにそれだけで満足して、時々穴から出てきてみんなと乾杯しているという調子ではだめです。何とかシンセサイズといえますか、ゼネライズと言うとよくないのですが、何かこういう観点からイルミネートするということがある程度強く出されないと、せっかくの英知がなかなか生きないと思います。

内藤湖南はたくさん読んだ人だと思います。20世紀の初めごろにあれほど漢文を正確に読めたのはすばらしいと思いますね。漢字が読めない人が多いと言われていますが、1941年か1942年でしたか、東条英機総理がやはり漢字を読めなくて皆の批判を浴びています。今に始まったことではなくてずっと前からそうなのです。19世紀終わりから20世紀初めごろの内藤湖南のような人はよく読めたのだと思いますよ。

それから幕末に活躍する福井藩主の松平春嶽という人は、中国語辞典を1人で作っているわけですから、やはり学力というか読み込み方がまったく違うということはあると思いますね。別に日本だけというわけではないのですが、全世界の現在の中国学者の読み能力というのは意外と狭くなっているのではないかと私は思います（深くはなっているかもしれないですが）。ですから私がここで本当に強調したいのは、もっと勇壮にモンゴルの騎兵みたいに進むようでない、こういう大きなプロジェクトの雰囲気合わないということです。ロシアの歴史も勇壮なのですが、あれほど文学が面白いのに歴史の本を読むと面白くないのですよ。どうしてなのかは分かりません。別に遅れているわけではないのですが、歴史が面白くないというのはよくないことです。インド史を研究している方がここにいますので何とも言いにくいですが、インド史も意外と面白くないですね。僕はインドも中国も行って少し教えたことがあるし、雑誌に載せたりもして交流はあります。インドの歴史は面白くないというイメージがありますが、本当は面白いようでして、ジェームズ・ミルを読むと実際に面白いわけです。インドには行ったこともないのですが、それでも立派なものだなとも思います。

そういうわけで私が言いたいのは、せっかくこれだけのスティミュラス・パッケージですから、もっと勇壮に大風呂敷を広げてほしいということです。それから概念的には、基

本的な研究はたくさんあるわけですから、日本だけでやろうなんていうことはせず、全世界にスラブ研究センター帝国のようなものを作るぐらいに努力することです。スラブ研究センターなんて矮小な名前もやめて、グローバルセンターとしてはいかがですか。スラブというのはよくないと私はいつも思います。どうしてそんなに小さくするのでしょうか、もっと大きくしたらいいのではないかと思います。

概念的なフレームワーク作りを

まとめますと、私が言いたいのは、ある程度の大言壮語をやらないといけないということです。そのためには、今までの歴史家が結構いいことを言っているわけですよ、それを何とか使うことができないかというのがひとつです。それから第1班から第6班までありますけれど、これがどこまで一緒に考えるものがあるかというのは、かなり疑問に思っています。ギリシャ語でシンポジウムが饗宴で、酒飲み会という意味だということを誰かから聞いたことがあります、それだけになってはまずいので、何か概念的にフレームワークのところでもう少ししっかりとした柱といいますか、青写真のようものをつくってほしいです。

特に1班から6班まで、比較的概念化しやすいというか、フレームワークについてこれがスラストであるというような形で進めたらと思います。国際秩序の再編と、先ほどのファリード・ザカリアのような話で、アメリカ後とモンゴル後を比較してみるとどうでしょうか。モンゴル帝国というのは、例えば私も考えているのですが、USドルみたいなものがなくてその代わりが軍票だったわけですね。それが堺屋太一の本によると13世紀に85年続いて軍票だけで問題なかったわけです。つまりビジネストランザクションがおかしくなると、2008年9月に始まった激しい大不況をトリガーするようなことは1回もありませんでした。ユーロは2000年から始まって、もう *imminent disappearance of Euro* というのさえ出始めたくらいよたよたしているわけですが、モンゴルの軍票はとにかく85年もちこたえました。それではUSドルはどうなるかと考えますと、1971年に金との兌換制をやめたわけですから、軍票とほぼ同格であるという観点からも考えられます。1971年に85年を足して何年になるかという、2056年ぐらいですね。私は大胆に予測して2056年ごろにはアメリカ帝国にがたがるだろうと考えているというだけで、このことについては何も書いてはおりません。しかし帝国とか大国といったときには、そのくらいのタイムスパンと、似たような大国を比較するという意気込みがないと、あまり面白いものが出てこないと思います。

ロシアからベトナムあたりまで一気に征服して、アフガンだけではなくてイランも攻めるくらいになってアラブも攻撃して、それで軍票にしてもそうですが、モンゴルは軍事がきわめて強力だったわけです。今のアメリカも軍事は非常に強力なのですが、ただしそれ

を行使しづらいのですね。イランをやっつけようと思ったらロシアが文句を言うので、ロシアに反対すると思われるところは除いてイランについて何とかするということになります。アゼルバイジャンにロシアのミサイルを造ることになるのかどうか分かりませんがね。そういうことがあるくらいアメリカの軍事的な力というのは、もうモンゴルなんて比較にならないくらい圧倒的なのですが、それでもうまくいかないわけです。

そうした点をヴェルナツキー的に考えるなら、やはりこれは地形的な問題もあって、アメリカの力は大西洋と太平洋に分かれていて、距離も遠いからうまくいかないのかもしれませんが。しかし今やもっと大地に根差した中国やインドやロシアが強くなるかというところでもなくて、2050年になって人口がまだ増加しているだろうと自信を持って人口学者が言っているのはインドだけですね。ロシアはもうがたがきていて、10年から30年も経つと5,000万人くらいになるのではないかと言われています。日本だって50年後には6,000万人になるという人がいますからね。

中国も2020年ごろに人口減が始まるのですよ。無理して子供を1人にするなどということを決めて、それで生まれたなら届けないかわりに賄賂をよこせという腐敗幹部がいたりするわけですね。人口が増えるとまたいろいろな面倒くさい問題があるから、これはしばらく外せないと思います。そういうような大きな展開の中で比較をしていくと、アメリカ後の中国、インド、ロシアはどのように展開するのでしょうか、インドだけが笑うのかという感じがしないわけでもないですね。

そんな馬鹿などと言われるかもしれませんが、私は親印派ですので、インドは軽視しがたい、過小評価しがたい能力と発想を持っていると思います。本当に *everything, anything is possible* ですね。ですから時間の計算は少し怪しいですが、2050年になって人口が増加しているのは絶対にアメリカとインドだけです。中国は威勢よく8%維持なんて言っていますけれど、2020年には5%も怪しくなってくるでしょう。ロシアはもうモンゴルのくびきに遭ったときの人口に匹敵するような方向に行くのではないですか。それは500万人くらいですか、そこにまではいかないと思いますけどね。

そういうわけで長いスパンで威勢よく考えるというのが、このような大きなプロジェクトにはぜひ必要ですので、期待というよりも激励をしたいなと思ってまいりました。どうもありがとうございました。